The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	奥の細道ところどころ（三）
Author(s)	小島, 吉雄
Citation	語文. 1951, 4, p. 26-31
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68388
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

奥の細道ところどころ（三）

小島吉雄

六、芭蕉の誤記と素龍の誤写

俳文学会々報第一号に、小宮豊隆氏の「奥の細道と曾良の随行日記」と題する講演要旨が載ってゐる。もとより講演の要旨であり、文責も記者にあることだから、小宮氏の講演論旨の委曲を正確に知ることは出来ないが、しかし、この文章を通じて推察せられることは、小宮氏の講演は、「芭蕉の奥の細道の記事と曾良の随行日記の記事とが一致しないからと言って、奥の細道の文を作為であり虚構であると断言することは出来ない」といふことを述べられたもののやうである。曾良の随行日記の発見以来、曾良の日記の記事と違ふところは、悉く芭蕉の作為であるかの如く論じるものがあるので、小宮氏の論は、さういふ論者への一つの警告として述べられたと考へてよろしからう。いかにも、小宮氏のいはれるやうに、曾良の日記と相違する個所を悉く芭蕉の虚構とすることは、論者の行きすぎであり、間違ひであらう。けれども、奥の細道の記事が悉く事実どほりであるとするのも、また如何かと思はれる。問題は非常に微妙である。わたくしも、九大の文学研究第三十七輯に「奥の細道覚書」を執筆して以来、あちこちの講演や文章で、しばしばこの問題に触れた論をなしてゐる。その責任上、このたびは、もう一度、この問題を茲に採りあげて、わたくしの考へをはっきりさせておかうと思ふ。そして、まづ順序として、誤記、誤写の問題から述べて行かうと思ふ。

曾良の日記と違ってゐるばかりでなく、広く実際の事実とも違ってゐる部分が、奥の細道の中にはある。たとへば、三月三十日に日光に泊ったといふ記事とか、越前丸岡の天龍寺とかいふのが、それである。元禄二年三月は小の月であったから、二十九日までしかなく、三月三十日といふ日は、暦の上には実在しなかったのである。また天龍寺は松岡町にあって、丸岡町にあるのではない。これらは、奥の細道の明らかな書き誤りである。ところが、われわれが、今、定本としてゐる奥の細道は、素龍浄書本であるから、かういふ奥の細道の誤記は、素龍のしわざか、また芭蕉の原稿が既にさうであったのかといふことが問題となる。そのことを一々正確に判別するためには、芭蕉の自筆本との照合が要請せられるが、そして、大阪府下の淀川高校の西教諭の話では芭蕉の草稿本が現存する由であるが、われわれは今それを見てゐないのであるから、正確な判別は不可能である。けれども、幸ひなことには、本誌第二号で杉浦正一郎氏の紹介せられた曾良伝来本その他の文献を参考することによって、ある程度までの推定判別が可能である。

さて、前述の三月三十日日光宿泊のことであるが、今日知られてゐる奥の細道のどの写本にもみな三十日となってをり、しかも、それより以後の記事がこの日順を追うてゐるので、これはどうしても芭蕉の記事がさやうになってゐるのであって、素龍の誤写とは考へられない。また、丸岡の天龍

寺も芭蕉の誤記であって、素龍の誤写ではあるまい。曾良伝来本にも丸岡となってゐる。また、飯坂温泉のことを飯塚と書き、笠島の条に「笠島の郡に入れば」とあるなども、芭蕉がさう書いたのであらう。他の芭蕉自筆によれば「笠島の郡」と書かず、「名取の郡」と書いてゐるのから考へると、芭蕉も笠島は名取郡であることは十分承知してゐたのであらうが、奥の細道では、それをどう思ひ違へたのか、或はわざと意識的にさうしたのか、その辺は明らかでないが、ともかく笠島の郡と書いたのである。ここのところは曾良伝来本も素龍本も一致してゐる。それから、やはりこの笠島の郡の続きに「藤中将実方の塚はいづくの程ならんと人に問へば、これよりはるか右に見ゆる山ぎはの里を蓑輪笠島といひ道祖神の社かたみの薄今にありと教ゆ」とあるが、曾良本も素龍本も「はるか右に見ゆる」となってゐる。しかし、猿蓑や芭蕉自筆の句の詞書などには、すべて「左の方」となってゐるし、地理的に言っても芭蕉のこの時の位置からは笠島は左の方に当ってゐるのであるから、この奥の細道の「右」は「左」の書き誤りと見るべきだといふ説がある。書き誤りだとすれば、やはり芭蕉が書き誤ったのだといふべきである。だが、ここのところは、クオーテーションに入るべき部分で、すなはち尋ねられた人の答への言葉であるから、答へてゐる人の側から言へば、まさしく右の方でなければならぬ、芭蕉はその意識のもとにかう書いたのであるといふ説をなす人もある。もし、そのやうに解釈すれば、この右は書きあやまりではない。この説もまた一理ある説だから、わたくしは、この「右」のところだけは、書き誤りと断定することを躊躇するのである。但し、「飯塚」は曾良の随行日記には飯坂とある。飯野哲二氏の説があるにもかかはらず、わたくしには、どうも書き誤りのやうに思へるのであるが、どの本にも皆飯塚とあるから、これは恐らく芭蕉自身の原本がさうなってゐたのではないかと想像せられるのである。

次に、少し飛んで、北国路に入ると、奥の細道は「越中の国市振」と書いてゐる。市振は実はまだ越中の国ではなく、越後の国に属し、国境に臨んでゐるのである。これも書き誤りであるが、この書きあやまりも芭蕉のしわざと見るべきである。恐らく、芭蕉が思ひ違へをしてゐたのであらう。また、山中温泉の条に、「その効、有明に次ぐといふ」との文章があるが、有明といふ温泉は、どこにもない。曾良伝来本では「有間」となってゐる。有間は有馬の宛字である。それから類推して、この有明は、有間の書き誤りだといふことが出来る間の字の草躰と明の字の草躰とに類似があるから、この書き間違ひが起ったのであらうと思ふ。曾良伝来本が「間」と書いてゐるのから推考すると、芭蕉の草稿にも「間」となってゐたのであらう。曾良本が比較的忠実に芭蕉の書き癖を写してゐることは、たとへば等躬を訂正して等窮としてゐるのなどにもうかがふことが出来る。従って、曾良本から芭蕉筆本をある程度まで推察することが出来るといふものである。すると素龍本に有明とあるのは、素龍の書き間違ひと断じて差支へなささうである。

かういふ風に、奥の細道には幾つかの誤記と断ずべきものがある。そして、有明の如きものを除いて、その大部分は芭蕉の誤記と考へられる。然らば、この芭蕉の誤記は如何なる原因によって生じたものであるか。三月三十日は、明らかに芭蕉の記憶違ひである。元禄二年に三月三十日のなかったことを覚えてゐたらば、芭蕉はもちろんこんな記述をしなかったであらう。丸岡の天龍寺とか市振とかいふのも、またこの同類である。つまり、芭蕉の記憶上の錯誤にもとづく誤記である。ところが、笠島の郡

といふのは、単なる記憶上の錯誤とは言へない。前にも述べた如く、芭蕉には笠島は名取郡の内だといふ正しい知識があったのである。にもかかはらず、ここでは笠島の郡としるしたのである。従って、これは記述の際の単なる錯誤か、或は意識しての曲筆かが問題とならねばならぬ。もし、意識しての曲筆とすれば、芭蕉は語感とか語調の上とかから、わざとかう書いたものとしか考へられない。しかし、それはわれわれ後人の考へすごしであって、実は笠島からの連想で、迂闊にもこんな間違ひをやったので、他意がないのかも知れない。本当のことは推量するよりほかないのであるが、この連想から来る間違ひといふのが、真実にちかいのではないかと、わたくしは考へるのである。いづれにしても、結論的には芭蕉の誤記は、すべて執筆の際の不用意から来る書き間違ひであると考へてよろしからう。

奥の細道には壺の碑の碑文を載せた個所があるが、それが正確なものでなく、曾良の記録にはその正確なものが載ってゐるにかかはらず、芭蕉は敢へて正確を期さうとせず、ただその碑文から彼が受けた感銘を読者にも理解させ得る程度に大略が分ればよいといふ大雑把な書きとめ方をしてゐる。さういふ例から考へても、前述のやうな誤記は、芭蕉としてはあり得ることなのである。

七、曾良の随行日記との異同

曾良の随行日記にあって、奥の細道には出てゐない事実があり、またその逆に、奥の細道にあって、随行日記に出てゐない事実がある。また、両方ともに載せてゐる事実でも、その内容が相違してゐるものがある。たとへば、市振の関で遊女と同宿したことは、曾良の日記には出てゐない。また、曾良の日記では、七月十二日に越後の早川を渡るとき、芭蕉がつまづいて荷物をずぶ濡れにした話が出てゐるが、奥の細道にはこのことが全然しるされてゐない。曾良の日記にないからと言って、芭蕉の記述は虚構だとは断言出来ない。遊女との同宿は事実であったけれども、日記には書き洩らしてゐるのだといふ考へ方も出来るからである。そして、その虚構なることを証明する材料が他にないからである。また、奥の細道にしるされてゐないからと言って、曾良の日記の記事は出鱈目だとは言へない。曾良の日記は実用のための日録であって、その記事には少しの虚構もないと見なければならない。或は書き洩らしてゐることがあるかも知れないけれども、書いてあることには嘘がない筈である。その記事が一方にだけしか載ってゐないといふだけでは、その記事の真偽を云々するわけには行かない

次に、両方ともに載せてゐて、しかもその内容の同じでないものには、二種類がある。その一つは、旅程の上での相違である。たとへば、日記には白石泊りとなってゐるのに、奥の細道には岩沼宿りとなってゐたり、日記では六月六日月山登山が細道では六月八日となってゐるのなどがそれである。この種の相違は相当に数が多くて、平泉で経堂を開帳しなかったのに、開帳したやうになってゐたり、越後路を十四日かかってゐるのに細道では九日であったり、那須の篠原と那須八幡宮とを別の日に訪ねたのを同日のうちに経廻したやうに書いたり、松島に一泊したのを二泊したと書いたり、野田の玉川や沖の石を塩釜に蒼いてから、後戻りして見に行ったのを、途中で見物した上で塩釜に蒼いたと記したりしてゐるのなども、みたこの部類に属すべきものである。このうちには、芭蕉の記憶違ひもあるであらう。けれども、記憶違ひでなく、意識して曲筆したものもあるであらうと思ふ。曾良の日記の方は、その執筆意図がさきほども言ふとほり、事実をありのま

まに記録するといふ点にあり、旅行の日々を矢立の筆でその日その日に書きとめて行ったのであるから、まづは事実に間違ひがないものと信じてよろしからう。月山登山の条でも、日記の方はその前後の記事が精細であって、しかも撞着せず、更に三日に羽黒に着いて五日権現参詣までは、日記と細道と両方の記事が一致してゐるのだから、これは芭蕉の方が間違ってゐると断ずることが出来る。すなはち、月山登山の日附の相違は、芭蕉の記憶間違ひもしくは書き間違ひと考へられる。また、越後路を「その間九日」で踏破したのも、芭蕉の記憶がうすれて、よい加減に日数を概算して書きしるしたのだとも言へるだらう。前項の誤記の条で述べたやうな芭蕉の不用意の誤りもあることだから、右もその同類と考へられ、芭蕉としてはありさうなことに思はれるのであるが、那須の篠原の記事や、岩沼一泊、松島二泊等の記事にまでこれを拡充して当てはめて考へることが出来るかどうか。これをしも芭蕉の誤記であるとし、または記憶の錯誤であると言ふならば、奥の細道の筆はあまりにも出鱈目であり、無責任である。わたくしは、今、相違する点ばかりを挙げてゐるのであるが、実は、奥の細道と日記とには、相違する点よりも一致する点の方が多いのであって、その点から言へば、芭蕉には旅行中のメモがあって、それをもとにして筆を執ってゐるのではないかと思はれるふしがある。またその行文を仔細に検するに一字一句をも苟くせざる周到なる執筆上の用意がある。だから、奥の細道の筆は、出鱈目であり、全くの不用意であるといふことは出来ない。それから、元禄二年には芭蕉は四十六才であり、この紀行文の執筆年月を出来るだけ繰り下げても元禄七年五十一才を下らないのであるから、いくら病弱の芭蕉だったとはいへ、五年や六年でさう無闇に記憶の錯乱を来す筈がなく、耄碌する筈もない。もし、記憶のうすれてはっきりしない場合は自分の旅行メモを繙くことも出来たらうし、曾良に訊くことも出来たであらうから、奥の細道には、記憶違ひといふものは、ごく少数であると見なければならない。思ふに、芭蕉は、すくなくとも曾良の日記と相違する個所に於ては、事実を忠実にかつ正確に記さうとする意志が最初からなかったのである。そして、そのうちで、月山登山の日附の相違などは、意識せざる誤りであるかも知れないが、岩沼泊りとか那須篠原廻りとか松島見物とかの記事は、その事実にたがうてゐることを意識しつつしかもなほそのやうに書きしるしたのではないかと疑はれるのである。曾良の剃髪は元禄元年のことであるにかかはらず、「旅だつ暁、髪を剃りて墨染にさまをかへ」と記して虚を構へてゐる例もあるので、このやうな虚構もまた意識してなされてゐると言っても、決して不当ではないのである。

次に、両方ともに載せてゐて、その内容の同じからざる記事のうち、第二種に属するものは、その事実には大差がないが、その表現の上に誇張潤色のある場合である。たとへば、浅香の沼の条に、「沼を尋ね人に問ひ、かつみかつみと尋ねありきて、日は山のはにかかりぬ」とあるなどは、それである。浅香沼を経て二本松に出で黒塚を見て福島に宿ったことは、日記も細道も同じであるのだが、「かつみかつみ」と尋ね歩いて日暮れに及んだといふのは芭蕉の誇張である。日記の方では、郡山を日の出前に出発し、午前中に浅香沼を見てゐる。芭蕉のいふやうに浅香沼で日の傾くまで停滞してゐては、その日のうちに黒塚を見て福島にまで辿りつくことは出来ない。従って、「日は山のはにかかりぬ」は、事実を誇張した芭蕉の文飾である。また、「かつみ」についての知識は既に須賀川の等躬から得てゐたのであって、人にも問ひ、尋ね

歩く必要もなかった筈であるから、ここにも芭蕉の文飾がある。或はまた、市振の条に、「この間九日、暑湿の労に神をなやまし、病おこりて、事をしるさず」とあるが、九日が芭蕉の誤りであることは前言したところだからこれは問題外としておいて、「暑湿の労に神をなやまし」は曾良の日記にも暑さと雨とに悩まされたことが出てゐるから事実であるが、「病おこりて」は言ひすぎであり、誇張である。曾良の日記によれば、病をおこしたのは、むしろ曾良であって、芭蕉の方は特に病と称すべきほどのことはない。また、松島から石の巻へ行くところの記事にも、「ちとすうぜうの行きかふ道そこともわかず」と言ひ、石の巻では宿からんとすれど、更に宿かす人なしと記してゐるが、これなども芭蕉の誇張潤色である。芭蕉らは石の巻街道といふ馬次ぎ場のある街道を歩いたのであり、途中であった人の紹介で石の巻では四兵衛といふ人のところに宿ったので、宿なしの憂き目を見たわけではなかった。かういふ文例をあげてくると、まだ幾らもあるのであるが、いづれも事実を潤色し、虚構のあとが見られるのである。つまり、これらに於ては、芭蕉は意識して筆を曲げてゐるのであると言はざるを得ない。

以上の如く、仔細に検討して行くと、曾良の日記の記事と相違するものは、すべて芭蕉の虚構であるといふことは出来ないが、奥の細道の記事は悉くが事実どほりであるといふことも言へない。芭蕉の意識せざる誤記もあるが、意識した虚構もあること、上述の如くである。そして、曾良の日記と相違する点だけで言へば、無意識の誤記よりも意識せられた虚構の方が、その数が多い。

奥の細道には、文章のみならず、俳句にも虚構がある、すなはち、「あらたふと青葉若葉の日の光」といふ句の出来た三月末の日光は未だ青葉の季節ではなく、しかもその日は曇ってゐて陽光は見られなかったのだといふこと、また「荒海や佐渡に横たふ天の川」の句に於て、芭蕉は出雲崎でもその他の佐渡の見える海岸のどこででも雨のために天の川を見てゐないし、出雲崎では事実上天の川は佐渡へ横たはらないといふことなどから推考してゆくと、これらの句は虚構の句であるといふことが言へるのである。

さて、このやうに、奥の細道には虚構があると言へば、わたくしが何か芭蕉をけなすかの如くにわたくしを非難する人がある。また或人は、このために芭蕉の価値が半減したかの如くに思ふやうである。だが、それらは、いづれも大きな誤解であって、わたくしは虚構があるからと言って芭蕉をけなしてゐるのでもなく、またその文学の価値はこれがために減殺せられるといふのでもない。奥の細道が曾良の日記と相違するところがあり、事実をありのままに述べてゐないのは、その執筆意図に相違があるからである。曾良の日記には文芸意識がないけれども、奥の細道には、強い文芸意識が作用してゐる。わたくしが克明に奥の細道と曾良の日記とを比較検討して、芭蕉の虚構の性格を明らめようとするのは、この虚構を手がかりとして、芭蕉の創作意図を究明し、そして、更に進んで奥の細道の文芸的性格を考へようと思ふからである。

わたくしたちは、まづ芭蕉がなぜこのような事実を曲げた筆を弄したのであらうかといふことを考へてみなければならない。それには、その曲筆潤色が読者にどういふ効果を与へてゐるかといふことを考へるのが近道である。芭蕉の書きあやまりや記憶のあやまりから来た事実との相違は、ここでは問題とならない。専ら、芭蕉が意識して事実を曲げて書きしるした場合のみを考察の対象とするのである。これについては

「奥の細道覚書」に大略をしるしたことであるから、今は詳説するを避けるが、その文のかもし出す効果から推論すると、実際の旅程を変へて書いたのは、読者の印象を鮮明ならしめて記述効果をあげようとするのである。また、浅香の沼のかつみを尋ね廻って日も暮れ方になったといふことは、風流雅懐を強調したのであり、懐古の情を強めるためだったのである。越後路に於て、「事をしるさず」と述べて、記事を省略したのは、この間の旅路が風流事に乏しく、懐古の情を誘ふものもなかったからであらうと思ふが、さきのやうに、風流韻事のためには事実をまげても筆に力を入れるかはり、またこのやうに風流に乏しいときは記事を省略してしまふといふこともあるのである。しかし、「病おこりて」と、特記したのは、この語によって、旅の心細さ、わびしさが言外に汪溢することになるからである。松島から石の巻に出るところを樵夫の行きかふ小径を辿って道ふみ迷ひといひ、石の巻では宿かす人なしと述べたのも、その文の効果から考へて、やはり旅のあはれさ、わびしさを強調せむがためであったらう。かういふ風に旅の感傷には、特別力を入れてゐるのである。つまり、記述効果をあげるために虚構をあへてしてゐるのであって、第一類の旅程の順序を変へたものは、旅の印象を鮮明ならしめようためのものであり、第二類の事実を潤色したものは、旅の風流を強調したり、懐古の情や旅の感傷を強調したりする役目を果してゐる。

奥の細道には、事実とその事実を取扱ふ視点とに於て曾良の日記と一致するものが若干ある。それを拾ひ出してみると、仙台での加右衛門の話、松島の雄島に住む隠者のこと、或は玉生一泊、出羽越の険難等であるが、加右衛門や雄島の隠者は、いづれも風流雅懐をたたへ、その隠逸的性格に心ひかれてゐるのであり、玉生泊りや出羽越やは旅のわびしさを揺いてゐるのである。象潟の旅で「あまのとま屋に膝を入れて雨の晴るるを待一ったのも、また日記のとほりであった。芭蕉は、かういふ風流事や旅の感傷をそそる事実に対しては、極めて忠実だったのである。これを今述べ来った虚構の内容と照合するとき、両者に共通のものが発見せられる。すなはち、奥の細道の一篇で、芭蕉が力を入れて意図したところが、那辺にあったかを推察し得るであらう。但し、同じ旅のわびしさではあっても、あまりに不風流殺風景な場面は省筆して記録しない。たとへば、早川で芭蕉が転落して全身ずぶ濡れとなったことは筆にしない。これはその事実があまりに現実すぎて殺風景であり一片の風流味をも伴はないからである。芭蕉の描く旅のあはれさ、わびしさには、一脈の詩味の漂ふことが必要だったのである。旅の風雅と旅のわびしさとを強調し、旅への詩的感傷を燃やしつづけてゐるのが奥の細道での芭蕉であった。市振での遊女と同宿の一と件りも、人の世の旅に於ける詩的感傷の強調である。

芭蕉は、奥の細道の一篇に於て、宇宙人生を無常流転の相で認識する世界観を以て自然をながめ、人事をとりあげてゐるのであって、冒頭文の「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり」がこの一篇の主想であり、巻末の「蛤のふたみに別れゆく秋ぞ」の句はこの冒頭文に対して結びの役目をつとめてゐるのである。このことは、小宮豊隆氏も「芭蕉研究」で既に指摘してをられるところであるが、この世を旅と観ずる世界観を主想とし、この主想を力強く展開させて、人世の旅路におけるほそぼそとした無常流転の寂寥感と恒常にして永遠なるものへの思慕とを表出する散文詩的意図を以て芭蕉がこの一篇を書きあげたのだといふことは、奥の細道に於ける事実を曲げた筆致や虚構の性格からしても導き出される推論である。（四五頁へ続く）